

オシャレまぞく桃andシャミー

一才

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

桃の筋肉への情熱は、年頃のJKらしさのかけらもない言動、行動が目立つ。

そんな桃に一抹の不安を感じる関係者たち。

そんな桃をオシャレにしようと、いろいろな手段を用いて年頃のJKへと修正するためオシャレの道を鍛えていくのだ！

目次

スカートの桃ってなんかエッチですよね	1
唇を彩る桜と桃	6

スカートの桃ってなんかエッチですよ

ふと頭の片隅で彼女の姿を思い浮かぶ。

あの桃色魔法少女、魔法少女の時こそフリフリでヒラヒラなスカートを履いているが、はたして私服の時はどうだったのか?と。

制服を除いても、スカートを着た彼女の姿を、シャミ子は思い返せなかった。

率直な疑問を桃に問いかけてみる。

「桃って制服と魔法少女の姿以外ってあんまりスカート履かないですよね?」

「あんまり似合わないから…」

「そ、そんなことない!きつと似合う!桃はその筋肉を誇った方がいい!」

桃はお腹が綺麗だ。

鍛えられた腹筋には、筋肉が身に付きおもわずさすってしまうほどに。

だからきつと細い足にも鍛えられた筋肉で、見惚れるほどに美しいはずだ。

少なくとも魔法少女の時に見える足はとてもきれいだった。

最押しの桃は可愛いのだ!かっこいい服もいいけど可愛い服を着せたい!あと足触りたい!

「…あんまり熱意こめて言わなくていいから」

「桃はお腹もそうですけど足もすっごく綺麗で!興奮してきた!!」

「落ち着け!」

「ふぎゅう!」

恥ずかしいのか、私の体を背負い投げ、顔を赤らめながら桃は語る。「そもそもスカートはあんまり持っていないんだよ、1着あったかどうか…」

「それなら…買いに行きましょう!私も新しい服を買おうと思っただところだったんですよ!」

4万円生活の呪縛から解放され、今までは母親のおさがりか、古着

がほとんどだったシャミ子。

しかし年頃の女の子。彼女は自分の好きな服を買いたいと思い、桃にも付き合ってもらおうよう催促する。

「それならミカンと一緒に…」

「ミカンさんはウガルルちゃん勉強道具を買いにすでに出てしまっています。ちなみにご先祖もゴミ拾いに出て行きました」

「そういうえば、足し算ドリルを買いに行くとか言ってたっけ…」

「そして…見てください！」

誇らしげな表情を浮かべ、手元にある紙を桃の眼前に出し、見せつける。

1万円札、シャミ子の人生の中でもトップ3に入る大金である。

シャミ子がこんなお金を持っているわけがないと、不審に札を見返す桃。

「それ…どうしたの!?まさか盗んで…」

「そんなわけあるか!これはお母さんからもらったお金です!これで自分の好きな服を買いなさいと言われたのだ!」

「じゃあ別に私が一緒に買いに行く必要は…」

「駄目です!とにかく一緒に来るんです!」

普段と変わらぬドライな対応、あれやこれやと理由をつけ抵抗する。

しかしシャミ子の『今度たまさくらちゃん弁当つくってあげますから』

という言葉に、さつきまでの抵抗も明後日に流され、あつさり降参し、シャミ子と桃はショッピングセンターのレディースファッションのコーナーへと足を踏み入れた。

「桃はあんまりこういう服屋さんへは行かないんですか?」

「適当なお店に入って選んでるからあんまりこういう女の子っぽいコーナーは入らないかな」

「桃って本当…あれですよね」

「…あれって?」

「なんでもないです。ほら!これなんかどうですか?」

シャミ子が持ってきたのは赤チエックミニスカートで、季節を問わず着こなせるマストアイテムだ。

桃の下半身に重ね合わせ、上着の選定に入る。

桃はというと棒立ちで『えっそんなに短いやつ?』という感じで浮かない顔をしている。

しかしシャミ子にはそんな桃の表情も見ず、真剣な眼差しで体を凝視する。

「んーこれだと上は…あつすみません!」

「はいはいーいらつしやいませ〜」

「すみませんこれの試着してもいいですか?」

「あっはいどうぞードレッツサールームはこちらです〜」

「え?」

「さてさて…上はこれで…これとこれ…あとこれつと〜」

「しゃ、シャミ子?スカートを買うだけじゃなかったの?わざわざ着る必要なくない?」

「え?試着しないとどんなコーディネートかわからなくないですか?」

説明しよう!

この桃色魔法少女は友達とわいわい言いながら服を着せ合いつこすることなく、基本的には自分のセンスでこれだ!という物しか着てこなかったのだ!

そのせいか、彼女のファッションセンスは女子中学生レベル:下手すれば男子中学生レベルで止まり、基本はTシャツ+シャツの組み合わせが多くなってしまっている!

ようはオシヤレとは程遠い着こなししかできないのだ!

「とにかく着てみましょう!ほらほら早く早く!」

「えっちよつと」

「私も着替えますから見せ合いつこです!」

服を持たせ、無理やり試着室に放り込む。

私も隣の試着室に入り、手早く着替えを済ませ桃が出てくるのを待機する。

普段とは違う服装だからか、少し待たされると、少しづつカーテンが開かれる。

「ど、どうかかな?」

「ふわあ…やっぱり桃って足綺麗ですよね」

「あ、あんまりマジマジ見ないでくれないかな…あとやっぱり短くない…?」

赤チエツクのミニスカート、上はニットで、かわいらしさとセクシーな印象を受ける。

スカートから伸びる足は想像通り、スラリと細く、だが筋肉の乗った足には厚みも十分備わっているので、思わず両手でぎゅっと抱きしめてみたくなる。

「そーつと」

「な、なに触ろうとしているのかな?」

「ちよつとだけ…ちよつと…」

「ふん!」

「んぎやあ!?!痛い痛い痛い!!」

「まったたく…」

触ろうと延ばしていた両手を握られ、そのままぎゅっと握り絞められる。

想像以上の怪力に手が壊れてしまったかと思い、外された手を思わず見返す。

「うう…桃って恥ずかしがりやですよね…」

「うるさい!まったたく…シャミ子はなんでそんな触りたがるのかな」

「そこに綺麗なものがあったら思わず触りたくなりませんか?」

「…」

「そうです?普段と似た様な服装ですよ?」

シャミ子はセミロングのスカートに、桃とお揃いの桃色ニットという着こなし、新品な服ということ以外は普段の着ている服と比べると、そこまで変化の見られない服装だ。

自分好みの服を選んだつもりだったが、普段気に入っている服装を一つ一つ選んでしまったようだ。

「私はこれを買っちゃいますが…どうですか？それ買いますか？」

「まあシャミ子がオススメするなら買うけど…」

「じゃあこのまま着て帰りましょう！店員さん！」

「はいはい」

「この服をテイクアウトで！」

「どうもありがとうございます」

服をそのままテイクアウトして、帰り道の河川敷。

魔法少女の時は魔法の力で、捲られるのを防いでいるスカートの桃。

普段とは違う履き慣れないスカートで少しソワソワしている。

「そういえば…今日はなんで私に服を買いにこういうなんて誘ったのかな？」

「それは…そのお…」

「まあ別にいいけど…またたまに買いにこういうかな」

「どうしたんですか藪から棒に！」

「ミカンにも言われたんだよ、シャミ子と買い物に行ってきたらって」

「ああ…そうですか…そうですよね…」

「どうしたの？」

「いえ…なんでもありません。なんでも。」

「ふーん…変なシャミ子」

日暮れの帰り道、スカートをはためかせ二人の少女はパンダ荘へと帰っていった。

唇を彩る桜と桃

美しさの秘訣はこのリップ、唇に彩りを、ビューティーカラー新発売！

昼過ぎのお茶の間、学校の宿題を四苦八苦しながら書き進めているシャミ子を眺めながら、テレビを見ていた桃の目に入ってきたのは口紅のコマーシャルだった。

「うぐぐ…なぜ数学って公式がいっぱいあるんですか…全部わかりやすくしてくださいよ… $1+1$ は2くらいのやつでえ」

「口紅かぁ」

「ん？桃どうしました？」

「テレビ、口紅のCMやっててね。そういえばシャミ子って時々お化粧してるよね」

「そうですね。私は昔から体調が悪い時が多かったので、顔色を隠すためにお母さんから少し教えてもらってたんです」

「それは…ゴメン」

「え!?突然なんです!?謝らないでくださいよ!!」

「いや…可愛くなりたいとかそういう安直な理由かと思ったらそんな深刻な内容とは思わなくて…ほんとゴメン…」

「そ、そんな!?気にしないでください!!ほら!今は結構おしやれで使っているですよ!」

シャミ子を持つてきたポーチから取り出したのは、数多くの化粧品、どれも大切に使われている形跡がある。

一本の口紅を手に取りフタを取る。ちよつと色が濃い紫に近いリップ、シャミ子にしてはちよつと大人の色目だ。

「意外といっぱい持つてるんだね、高くない？」

「今は500円とか1000円ぐらいで売ってるんです!まあほとんどお母さんからのおさがりなんですけど」

「へえ…こんなにいっぱい必要なのかなって思ってたさ」

「私はポーチに入れられるくらいにしか持つてませんよ?みかんさん

の洗面台、この前見せてもらったらしい置かれてて驚きました」
「服もいっぱい持つてるからね、ん？これ…」

桃が見つけたのはシャネルのロゴの入った口紅、さすがの桃もシャネルがブランド品であることぐらいはわかる。思わぬ高級品に驚きの表情で聞いてしまう。

「シャミ子、これって…」

「あ！それはデパコスの中紅です。お母さんがプレゼントしてくれたんです」

「???ではこそす？」

「あ…桃はわからないですよ…すみません」

「なんか馬鹿にされてる気がする」

「ば、馬鹿になんてしてません！ただやっぱり桃って桃だなんて」

「…いいよどうせ私はクソダサだから…」

「ああ！また桃が闇堕ちフォームに！戻ってくださいい！」

桃は自作新フォームの酷評を受けて、ダサイ自分を指摘されると闇堕ちフォームに切り替わることが多くなっていた。

あれやこれやと励ましていると、機嫌が治ったのか元の私服に戻っていた。シャネルの中紅を手に取り説明を続ける。

「デパコスってのはワンランク上の化粧品のことです。そうだ、桃はどんな化粧品持つてるんです？」

「みかんが置いてった化粧水が洗面台にある」

「…他には？」

「……………」

「え？」

まるで宇宙人を見るような表情で桃を見るシャミ子。

「じよ、冗談ですよね？」

「だって運動したらどうせ落ちるし…」

「ええ!!?それでなんでこんなフレッシュフェイスに!？」

化粧一つしたことない桃は、ナチュラルメイクどころかずっとすっぴんのままだった事実には驚き、思わず頬に手を伸ばすシャミ子。

その肌は綺麗で、思わず頬ずりしたくなるほどにぴちぴちだ。

「化粧水も使わずにモモのようにピチピチ…卑怯ですよ桃！」

「知らないよ！姉さんもあんまり化粧とかしなかったから…」

「桜さんおおざっぱだから化粧苦手だったそうですね、みかんさんから聞きました」

「そう、だから興味も無かったし必要ないからやってこなかっただけ」
ピタツと手が止まる。

なんだろうとシャミ子を覗き込むと、口をぷくつと膨らませ、不満げな表情を浮かべている。

「も…もつたいない！もつたいないですよ！」

「え？もつたいない？」

「だって桃はこんなに綺麗で可愛い顔をしているのに…お化粧したことないなんて、もつたいないです！」

「べ、別に化粧して変わるわけじゃ…」

「変わります！いえ変えて見せます！桃！いまからデパートに行きましよう！」

「え、いまから？もう私修行に行く時間なんだけど…」

「修行は変更です！今から修行を美容に変更です！」

興奮状態のシャミ子を止めるすべはなく、なすがまま、デパートに連れて行かれる桃。

化粧品コーナーは所狭しに商品が置かれ、独特なおいを鼻に感じながら、様々な色彩が視覚に入り込み、落ち着かない。

「そういえば私と焼肉に行ったとき、ちよつとお化粧してましたけどどうしたんです？」

「あれはみかんにコーデイナーしてもらったんだ、なんかいろいろ持ってきてやってくれた」

「珍しい恰好でお化粧もしてると思ったら、そういうことだったんですね…」

店内を一通り巡り、シャミ子の背中についてくる桃。

いろいろと物色していたが、一つのコーナーにたどり着く。

「いろいろ考えたんですけど、やっぱりまずはこれですね！」

「これって…口紅？けど私はあんまりこういうのは…」

「いつもつける必要はないんです。気分を変えるときにつけると意外と楽しいですよ。ほら、これなんてどうです？」

シャミ子が持ってきた口紅は、赤よりは薄いピンク色に近いカラー。

知らぬ間に後ろに付いてきていた従業員に連れられるまま、化粧台に連れていかれる。

リップブラシで丁寧な唇に色をつけられ、ちよつと恥ずかしいが、鏡面に映った自分の姿に思わず目を見開く。

「ふわあっ！キレイです!!桃!!」

「キレイな色だね、これ」

「そう、これ桃色っていう色の口紅なんです！だから桃に似合うと思つて！」

「これだと色が目立たなくて結構好きかな」

「じゃあこれプレゼントします！待つててください！」

「え!?!いいよ?シャミ子に悪いよ」

「たまには私にもお返しさせてください！これはそんなに高くないので、行つてきますね！」

シャミ子はバタバタとお会計を済ませに従業員とともにレジへ向かう。戻つてくるまで手持無沙汰で少し売り場を見回す。

「あ…これつて」

一本の口紅が売り場の隅に飾られている。先ほどシャミ子の持つて行つたカラーとほとんど同じ色の口紅。

そつと手に取り、商品紹介のpopに目を通す。

見覚えのあるその色は、唯一彼女の知つている口紅の色だった。

「お待たせしました…つてあれ?」

お会計を済ましたシャミ子が桃の元に戻つてきたが、そこに桃の姿はない。少しすると後ろから桃がやつてくる。

「あれ、どうしたんです桃?」

「なんでもないよ、ちよつとトイレにいつてただけ」

「ふーん、買つてきましたよ!どうぞ使つてください！」

紙袋を受け取り、デパートを出る。あたりはすでに暗く、外灯と月

明かりで道が照らされている。

「知らない間に夜になっちゃいましたね。晩御飯が待ってます！急いで帰りましょう！」

「シャミ子、ちよつといい？」

「どうしたんです、桃？」

「これ、貰ってほしいんだ」

そういつてシャミ子の手のひらに置かれたのは一本の口紅だった。

「え？これって…」

「これ、桜色の口紅なんだ」

シャミ子に手渡し、その手を口紅とともに握りしめる。

「姉が使ってた」

シャミ子の瞳を桃はじつと見つめる。

「シャネルのこの色の口紅だけは使ってたの思い出して」

その瞳は夜の月明かりに照らされ、輝いている。

『大人になったらあげるね』っていわれて

すつと一筋の光が目を伝う。

「桃」

伝う光を両手で拭う。

「こんどはファンデーションを買いますよ。その次はマスカラ…桃と私でいつまでもキレイでいきましょう？」

「うん…ありがとう」

「それと約束です」

「約束？」

「目を閉じてもらえますか？」

いわれるがまま、目を閉じる。

すつと唇に何かが触れる感覚。

「目を開けてください」

シャミ子の手に持っているのは桜色の口紅、口紅の先が少し削れている。

その口紅を私の手に手渡す。

すつとシャミ子が目を閉じる。

「・・・・・・・・・・」

彼女の意図を汲み取り、すつと彼女の小さな唇に口紅の先を当てる。

お世辞にもキレイには塗れていないが、彼女の唇は桜色に染まる。おそろく私と同じ色に。

「桃が私の口紅をつけたら私も桃の口紅をつけます。私が桃の口紅をつけたら桃も私の口紅をつけてください」

「…うん、わかった」

「さあご飯が待ってますよ、帰りましょう」

シャミ子が桃の手を引っ張り、口紅を二人で握りしめ。彼女達はパ ندا荘へと帰っていった。

桜色と桃色、色はほとんど一緒だが、それは同じ色ではない。

闇と光、相反する属性は交わらない。

だが二つの色、属性が交わるとき、きつと彼女たちは美しく、そして強い存在になるだろう。

頑張れシャミ子、桃さん可愛く立派な女性になるのだ!!